

玉木田独步全集

第六卷

学習研究社

國木田獨步全集 第六卷（第二回配本）

G 六四三〇六

昭和三十九年九月十五日第一刷發行
昭和四十四年八月十日第二刷發行◎

定價 千八百圓

著 者 國 木 田 獨 步

編 集 者 國 木 田 獨 步 全 集

編纂委員會

發 行 者 古 岡 秀 人

東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五

印 刷 者 矢 島 貞 雄

長野市西和田四七〇

發 行 所

株式會社 學 習 研 究 社

東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五

電 話 (七三〇) 一 一 一 一

振 替 東 京 一 四 二 九 三 〇

欺かざるの記

前
篇

凡 例

一 底本

本書の底本は、第二、第三の大部分は自筆本文に據り、第一、第三の一部は田山花袋等校訂本文に據つた。但し、花袋本に於いては、自筆草稿から類推される用字法に従ひ、その表記法を訂正した箇所がある。

例 記憶→記憶 事情→事條 一層→一増

一 自筆本の校訂方針

一 原文を忠實に復原した。但し、作者が正字をふまへて使用してゐる俗字・略字は正字に改めた。

二 文字の誤用も判讀できるものはそのままとした。但し、忘想↓妄想の如き明かな誤記は改めた。

三 偽字あるいは獨歩の造字で意味の汲めるものは、ママを附するか、正字に戻した。

四 曖昧の文字は（ ）中にカを入れ、文字の脫落と思はれる箇所は脫カを入れて判讀に便にした。尙、難讀の語には（ ）内に振假名を附した。

五 本文中の空白部分は自筆草稿を踏襲した。

六 自筆草稿の抹消部分は「」の中に復原した。

(花袋校訂本緒言)

其晩年に於て獨歩はこの『欺かざるの記』を訂正して以て世に公にせんとするの志ありき。

病革まるや、自ら其業に就く能はざるを知り、吾等三人をして、代りて訂正出版せしむ。

歿後、吾等は其校訂の業に従ひ、つとめて其原文を増減改刪せざるの方針を取れり。篇中記する所にして、累を他に及ぼすものあらば、これ皆な吾等校訂者の責にして、故人の意にあらず。

明治四十一年十月初旬

田 山 花 袋

田 村 江 東

齋 藤 弔 花

目 次

第一

明治二十六年	二月		二
明治二十六年	三月		咒
明治二十六年	四月		七
明治二十六年	五月		三四
明治二十六年	六月		一四三

第二

明治二十六年	七月		一三
明治二十六年	八月		一四
明治二十六年	九月		二五
明治二十六年	十月		二五

第二

明治二十六年 十月		三二
明治二十六年十一月		三五
明治二十六年十二月		三三
明治二十七年 一月		三〇
明治二十七年 二月		三九
明治二十七年 三月		三三
明治二十七年 四月		四六
解題		四七
主なるヴァリアント		四七

第一

自 明治廿六年二月四日
至 同年六月卅日

第一の本文の校訂は初版本によつた。

二 月

▽明治二十六年の一月も飛ぶが如くに去れり。回顧して思ふに、果して悲しむ可き乎。吾の決して喜ぶ能はざるは明らか也。然れども果して悲しむ可き乎。吾れは悲しみたり、何となれば事多くは心と差がひたれば也。然れども亦た此の一ヶ月の吾に教ゆる所決して少なからざりしを思へば、慰むる所なきにしもあらず。

▽二月三日は吾に取りて極めて大なる謎語なりしを記憶し置かん。早朝吾は宿を立ち出でたり。其は轉宿の意切なりしかば、麴町區に其の恰好の宿所を搜索せん爲めなり。吾は成る可く下等の宿所を欲したり、何となれば切りに自ら思へらく、故郷の父母吾の爲めに其の酒を節し、其の費を縮めて吾に送るに當り、吾其の旅宿を撰んで卑汚賤食に甘ずる能はざるは、心術の卑汚薄弱なるを感じたる其の一なり。又た自ら思ふ、吾は終に世に好遇せらるゝの人に非ず、而も奮て理想の事業に當らんと欲せば貧賤に安じ水火を避けざるの決心なかる可からざるを信じ、之れが決心を固ふするには平生の用意修養の大切なるを知りたればなり、之れ其の二。又た自から計るに、少しにても儉約を積んで多少の餘裕を造り教會に對する義務を全うし、必要の書籍を購讀せんと欲したればなり、之れ其の三。求めて其の家を得ざりき。而て吾は意を翻して轉居の期を延すに決心したり。其は一つは自由社入社一件の成否定まりて後に

する方の利を思ひ、一は「青年文學」十六號の編輯を終りて後にすべきは、「青年文學」に對する事務上の義務なりと信じたればなり。路を轉じて今井兄を訪ひ、數分の談話を試みたり。⁽²⁾丁吉治氏の宅に立寄る。謎語は來れり。丁氏吾に自由社長金森通倫氏の意を通ず。金森の意は其の黨の爲めに盡すよりすれば應に然る可き思付きなりしなり。

曰く自由黨に新聞事業の發達し居らぬは極めて不用意千萬なるをもて、行く／＼は大に之れが擴張に盡さんと欲す。曰く、かるが故に新に入社せんと欲する者は、決して一時のやりくりたるを許さず、已に入社したる以上は此末全く身を新聞事業に投じ、又た自由黨の爲めに盡すの覺悟なかる可からず。故に丁氏は吾に問ふに、果して此條件を以てするも入社を望む乎。と、斷乎たる決心を促ながしぬ。兎も角も決心せり。『以て入社す可し』と、何に故に。

吾は吾に問ふ、第一、爾は職業を新聞事業と定むるの決心ある乎。と、吾は色々に苦心せり、様々に考へたり。

「職業」「職業」此の文字は今更らの如く其の解釋を吾に求めたり。然れども終に吾が最初の信仰（最初の信仰は平生の信仰の意なり）は最後の答なりき。『人間は職業の如何に由て其の眞價値を定むる者に非ず、北海の漁夫を見ずや、山間の樵夫を見ずや、神の眼は平等至公なり』と、之れ第一思想なり。而して、吾が教育、吾が境遇、吾が技倆、吾が志望（の幾分）は吾が新聞事業を否とするの理由を與へざりし也。吾は今更らの如く、決心せり。『吾は新聞記者の職につくを適當なりと信ず』と。

吾は已に此の答を得たり、他は元より易々たりし也。自由黨の爲めに盡すの決心ある乎てふ第二の問は

鐵斧の青竹を破るが如くに、痛切に明確に、即座に決答せられぬ。曰く『自由黨が其の天職を忘れざる以上は、自由黨が其の精神を殺さざる以上は、吾は元より心血を盡し、熱涙を傾けて其の隆盛の爲めに盡す處ある可し』と。人間感情の變轉も不思議なる者なる哉。かく決心し、かく確信し來るや、吾の思想は急轉激揚して百尺竿頭更らに一步を進むるの看ありき。自ら思へり、眉を揚げ、膽を張て思へり、自由黨の天職は吾が國政の大革新に在り、自由黨の精神は自由平等に在り。已に然り、之れ自由黨なり。若し或は自由黨にして此天職を怠り、此の精神を失はん乎、之れ黨員の腐敗のみ、黨員の墮落のみ、吾は寧ろ其黨員を改む可し。其の黨員を責む可し。之れ自由黨の精神を活かして其の肉を破くなり。又た、丈夫腕を振ふに足るの事業にあらずとせんやと、ア、急々化々、想像は想像を追ひ、空想は空想を生めり。心靈聲あり、停止せよと。暗愁は襲來せり、妄想は破れぬ。勇ましき決心は何時の間にや、重荷の如く吾が心靈を壓せり。壓せられ乍らも又た其の決心を翻す能はず。只だ暗愁は慘憺の色を帯びて吾を朦朧たる不安の室に導きぬ。此夜深更、將に、三時に垂んたる時、孤燈の下に紙をのべて書て曰く、『幽に悲みて、強く樂しみ、固く行ひ、休まず勉め、徐かに急ぎ以て天命を終らんか。靈の人なり、義の人なり、而して成效の人なり、明日を計る可からず。吾は生く可き乎、須からく永久に生く可し。』

明朝は早々、丁吉治氏を訪ふ可し、決心を語る可しとて、鶏鳴の曉近きを報ずる時、孤枕を抱て寒夢に入りぬ。ア、謎語果して解かれたる乎、吾之れを知らず、乞ふ一年の後を見よ、十年の後を見よ、百年の後を見よ。ア、後悔を以て解かる可き乎、血涙を以て解かるべきか、安心を以て解かるべき乎。神は

知るも吾は知ること能はず、然れども吾は信ず、神は自から解く者の爲めに解き、自ら助くる者の爲めに助くるを。

(1) 青年文學 二十四年十一月十五日創刊。五號迄は其會、以後は其社より發行。二十六年廢刊。獨歩、潮處子以外、柵山人(本名堀本貞一)、美妙、得知等寄稿。月刊文學雜誌。

(2) 今井 今井忠治。山口中學以來の親友。獨歩作「暴風」の主人公。

(3) 丁吉治 民友社同人、「自由」の外報專任。二十一年早稻田の英語本科卒業。池本姓を名乗つたことがある。

(4) 金森通倫 當時自由社社長。熊本英學校二期生。二十二年同志社の校長となつた。蘇峰の姻戚に當り、熊本バンドの一人で、組合教會派。

四日、土曜日。夜祈禱會に出席す。此の夜は吾も祈禱する所あらんとて出席したり。植村正久氏の感話あり、重に共勵會の事なり。此頃教會奮興の氣運少しく起り、殊に植村氏は大に熱する所あるが如し。吾も亦私かに教會に盡すあらんと決心して一月三十日の夜は植村、多田素の兩氏を訪ひ、色々と感ずる所を陳述し、意見のある所を尋ねたり。吾が教會に對する唯一の希望は乃ち教會員の懇情を盛にするに在り。吾は其爲めに教會の分治法を編出し植村、多田兩氏にもたゞしたり、兩氏とも賛成なり、只だ其の實行の如何を危ぶめり。さて植村氏の感話は終り、多田氏は續て云ふ、諸君將に教會奮興の事に付て感ずる所あらば今夜の如き、懇談すべきの好期ゆゑ、敢て隔てなく語り出でられよ、と。二三の人々は語り、或人は祈れり。而して吾は一語を漏す能はず、一句を祈る能はずして了はれり。吾は大に反省する所ありたり。吾の性情特癖を更むるなくんば、吾は終に自ら企てたる事の實行者たる能はざることを深く感じたり。吾は今日より此の點に付ては大に修養練磨する所なかる可からずと信じぬ。